報　告

ティヴォリのハドリアヌス帝のヴィラを訪ねて

野中　夏実

ローマから28キロ、ティヴォリの町から5キロほどの、二つの谷に挟まれた小高い丘の上に、ハドリアヌス帝が築いた大規模なヴィラの遺跡がある。

地下鉄の終点レビッビアからティヴォリ行のバスに乗ると、古くからあるティブルティナ街道を行く。ほぼ直線的にのびている道路と、両側に植えられた編笠松から、わずかながら古代の面影がうかがわれるだけで、特にローマに近いあたりには、ずいぶんたくさんの工場が建ってしまった。暑さと騒々しいバスのエンジンの音と、どれも似たような、白っぽい四角い建物がどこまでもつづく。その単調な風景がようやくとぎれたかと思うと、前方に青い山を望み、左右に石切場を見下ろす豪快な地点にやってきた。まもなくアニエネ川を越え、その水の深い青緑色がまだ瞼から消え去らないうちに、「ここですよ」という運転手の合図にせきたてられるようにしてバスを降りた。

ヴィラはそこからさらに1.5キロあまり離れているという。どこにでもあるような建物の並ぶ一本道を、ときおり自動車が砂煙をたてて走っていく。広場にはアイスクリーム屋が二軒あった。教会があり、その入口の脇に糸杉があり、しばらくして料理屋があった。人々は家々の奥深くで何をしているのか、真昼の太陽の下すべては静けさに包まれていた。

料理屋の角を折れて細い道を下っていくと、一面の向日葵畑になった。眩いばかりのその黄色は、そこらじゅうの鳥という鳥がそろって囀りはじめたような錯覚をおこさせるのに十分だった。空気は穏やかで心地よい。左手の豊かな緑にこんもりと蔽われた丘が、ハドリアヌス帝のヴィラにちがいない。

ヴィラという語によって人が思い浮かべるものはいろいろであろうが、「古代世界の王者の別荘の中の女王」と評されるヴィラ・アドリアナはとにかく大きい。南北の長さおよそ 1キロ、東西の最大幅 500メートルの敷地に、皇帝とその家族の居住空間のみならず、従臣や使用人のための建物をも

含む、大小さまざまの建築群が散在している。それらをひととおり、ある程度丁寧に見てまわろうとすると、丸一日はかかるであろう。いったいこのような巨大なヴィラを遺したハドリアヌスとは、どのような人物であったのか。

ハドリアヌスは、紀元76年スペインのイタリカに生まれた。10歳になるかならない頃、遠縁にあたるトラヤヌスによってローマにつれて来られ、そこで教育を受けたが、はやくから文学や芸術、そして特にギリシア文化に対する強い興味を示した。ラテン語よりもギリシア語のほうが得意であったとさえいわれる。「生来素質もあり、ギリシアの研究にひどく熱中していたので、ある人々は彼を《えせギリシア人》と呼んだ.」と伝記作家アエリウス・スパルティアヌスは伝えている。（Vit. Had. I. 5）

また軍人・政治家としてもすぐれ、105年に軍団司令官としてダキア戦争に参加し、107年にパンノニア総督となり、112年にはアテネのアルコン（執政官）に選ばれ、117年シリア総督になった。そして118年、トラヤヌスの死によって 41歳で皇位についた。

ところで彼は、二十年つづいた在位期間の過半を、先帝から受け継いだ広大な領土の視察に充てている。即位してまだまもない121年に第一回の属州査察旅行に出発し、126年末までにガリア、ブリタンニア、ライン河流域、ヒスパニアなど主に帝国の西半分を巡回した。そして、128年から134年にかけて、アフリカ、シリア、ユダヤ、エジプトなど東の領土を視察した。アテネは彼が好んで滞在した都市の一つで、125年－126年、128年、131年の少なくとも三回にわたって訪れている。時代はすこしさかのぼるけれども、アテネはキケロやホラティウスのように、富裕なローマ人の子息が教育の総仕上げとして逗留する留学地であり、当時もローマの政治的支配下にありながら、あいかわらず哲学の中心として栄えていた。

ハドリアヌスは公共土木事業によってアテネの町の復興をはかった。プラカの一角に残るハドリアヌスの図書館やリュカベトス山中腹のデクサメニ（貯水槽）のほか、パンテオンやギュムナシオンもつくり、ペイシストラトスの時代に着工されたオリュンポスのゼウス神殿をようやく完成させた、とパウサニアスは伝えている。（Paus. I. 18. 6-9）またシンタグマ広場からゼウス神殿の方に向かうアマリアス通りと、ギリシア奨学金事務所のあるリュシクラテス通りとの交差点に立つハドリアヌスのアーチは、両面が同様の造りであるが、それぞれに異なる銘文が刻まれている。アクロポリス側の面の銘文は、「ここはアテナイ、古い、テセウスの町である」と読まれ、ゼウス神殿側の面の銘文は、「ここはハドリアヌスの町であり、テセウスの町ではない」と読まれる。ペンデリ産大理石のこのアーチは、132年ハドリアヌス

によって、アクロポリスを中心とする旧市街と自らが築いた新市街との境界を示すものとして、築かれたものである。

ハドリアヌスがこうして即位し、属州査察に出かけている間、118年からすでにヴィラ・アドリアナの工事は進められていた。二回目の旅行を終えてローマに戻った134年には、主要な建物はおおかた完成していたと考えられている。彼の生涯の残りの四年間は、半ば永住用としてかなり綿密な計画をもとに築造されたというこの別荘で過ごされることが多かった。

ヴィラの敷地内に入って緩やかな坂道をのぼり、駐車場と売店を通り過ぎると、オリーヴの木の向こうに高い煉瓦塀が見えてくる。アーチ型の入口を通り抜けると、そこには豊かな水をたたえた大きな長方形の池があった。水面には空を流れてゆく雲や、岸辺の糸杉が姿を映し出していた。南側にはローマ平野が、北側には山の中腹にあるティヴォリの町が眺められ、頭上には大きな空が広がっていた。

この池を中心とする柱廊建築の遺構は「ポイキレ」と呼ばれるが、それはアテネのストア・ポイキレを模造したものであるという風に、ルネッサンス期に解釈されたためである。実際には大きさの点でも形の上でも少しも似ていないのだが、その名称だけが今日でも使われている。

ポイキレの隣には、「スタディオン」あるいは「ニュンファエウム」と呼ばれる遺構がある。両端が半円形をした細長い形状から、以前は競技場と考えられていたが、中央部分の長方形の石枠は小さな池の跡であることがわかり、現在では劇場風のニュンファエウムであるとされている。建物の床面には、淡黄・濃紅・深緑の大理石の美しい嵌め込み模様が残っていた。

ニュンファエウムから、大浴場、小浴場を左手にさらに進んでいくと、「カノプス」と呼ばれる区域に至る。そこで最初に我々の視界に入るのは、アーチとアーキトレーヴで交互に結ばれた個性的な列柱である。柱と柱の間には、ヘルメットをかぶり、盾を持った男性像（軍神アレス）、頭部の失われた男性像（ヘルメス）、それから襞のある、丈の短い服をまとった女性像二体（ともにアマゾン）が立っている。列柱と彫像の向こうには、エウリポスと呼ばれる大きな細長い池があり、その南端に半ドーム型のエクセドラが残っている。右岸には、アテネのエレクテイオンのカリアティドの忠実なコピーが四体とシレノス像が二体、台座の上に据えられて、水面に影を落としている。池の両側は自然の土手を形成し、樹木の緑もまた水と彫刻と建築の醸し出す絶妙の調和に色を添えていた。池には白鳥が棲んでいて、水面を優雅に自在に滑っていた。

右岸の半ばまで歩いて立ち止まり、手前のカリアティドにそっと触れてみ

ながらその横を通り過ぎ、南端のエクセドラまで行ってみる。正面には等間隔に配されたイオニア式柱が四本残っている。内部に三日月型のスティバディウム（大理石の腰掛）があり、湾曲する壁には八個の壁龕があった。壁龕は、半円アーチ型のものと、階段状になった長方形のものがあり、かつて前者には彫像が置かれ、後者には白大理石板が貼られていて、そこを伝って水が流れていたとされている。さらに建物の中央から後方に細長い廊下がのびていて、そのつきあたりにも水が滝状に流れ落ちていたとされている。廊下部分の天井は完全に閉じておらず、明かりとりとして設けられた開口部からは薄い光が差し込んでいた。

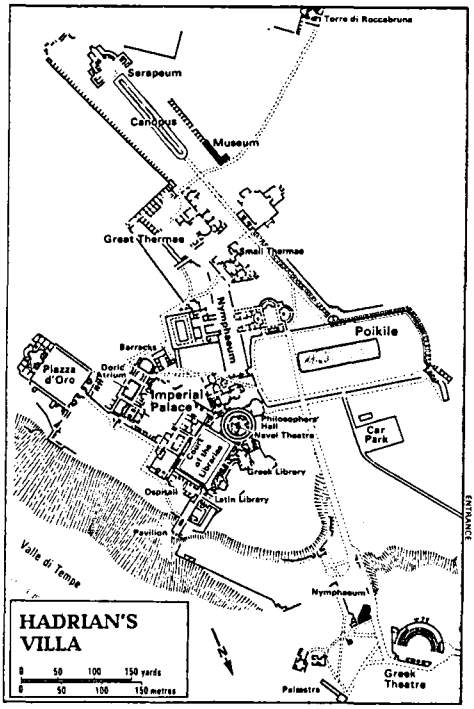
エクセドラの外に出て、反対側の岸を列柱の方に向かって歩いていくと、噴水を兼ねた鰐の彫刻があった。そしてさきほどは気づかなかったが、列柱の北側の、池から二、三メートル離れたところに、苔むした河の神の臥像が二体横たわっていた。

以前カノプスのエクセドラは、エジプトのヘレニズム都市カノプスの有名なセラピス神殿を模して造られたものであると解釈されていた。それはエウリポス発掘の際に、すでにみつかっていたエジプトに関連の深い彫刻数体に加えて、新たにイシス像をはじめとする六体が発見されたからでもある。しかし現在では、エクセドラは神託の洞窟というよりもむしろ庭のあるトリクリニウム（食事室）であるとする説が大方の認めるところになってきている。実際ティヴォリのカノプスは、神秘的な聖域というよりははるかに庭園トリクリニウムであるといった方がふさわしい場所である。ハドリアヌス自身がエクセドラの奥まった所に陣取り、側近の従臣たちはエクセドラの入口付近に、そして大勢の招待客はエウリポスの岸辺に設けられた席について、盛大な宴会が催されたのかもしれないと想像をめぐらす研究者もいる。ギリシア人もイタリア人もとかく南欧人は屋外で食事をするのを好むけれども、その点では古代からあまり変っていないのかもしれない。そういう嗜好というのも、いうまでもなく自然の美しさ・豊かさを喜びをもって享受できるような、温暖な気候に培われたものであるにはちがいないけれども。

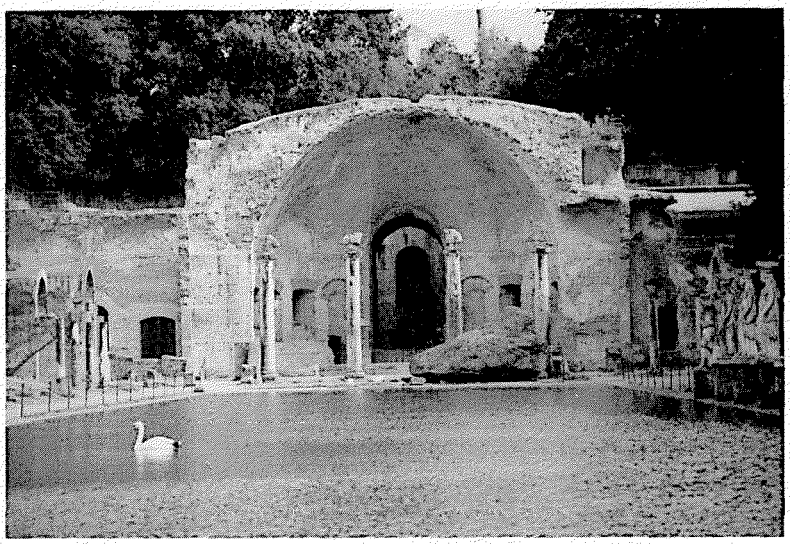
池に再び水を満たしたり、彫像のレプリカを推定位置に据えたりするのは、現代の古典考古学者による一種の修復だといえば修復にすぎないであろう。またエウリポスの両側の土手には、テラス状の花壇・植栽の形跡があるとはいえ、移ろいやすい植物のことであるから、現在茂っている編笠松や糸杉などの樹木や、めぐり来る季節ごとに咲く野の花が、ハドリアヌスが目にしていたのと同様の風景を形づくっているとはいえない。そしてエクセドラの建物にしても、もとは色とりどりの大理石やモザイクに蔽われた豪華なもので

あった筈だけれども、今では文字通りの廃墟となってしまった。結局ここを訪れて私が受けた印象というのも、往時の建築・風景というよりはむしろ目前の自然を背景とした廃墟そのものに美を見出すといったような、18世紀の前ロマン主義的な、その上おそらく多分に主観的な性格のものにすぎないのであろう。

しかしながらヴィラ・アドリアナが、16世紀のピロ・リゴリオや18世紀のピラネージをはじめとする多くの人々に、時代を越えて感動を与えつづけてきたことを考えると、そのおおらかな魅力はいったい何に拠るものであろうかと思わずにはいられない。そしてそれは、ハドリアヌスが生涯の最後に、いわば自らの体験・認識の集大成として築き上げた一つの芸術作品ともいえるこのヴィラの、特に総合芸術として見た場合の庭園について、精神文化史的観点から考察を進めることによって、少しずつ明らかになってゆくにちがいない。つまり、ハドリアヌスとその同時代人は庭園についてどのような思想を抱いていたのか、どのような理想郷のイメージを育み、それを庭に反映させていったのか、さらにその庭に異なる時代・文化・価値観の人間は何を見出すのか、といった点からである。



ヴィラ・アドリアナの全体図



カノプスのエクセドラ

ポイキレからティヴォリの山を望む

カノプスの列柱と彫像